

まち

No.3 2014年 新年度号

発行日：平成26年6月1日
発行：日本大学理工学部まちづくり工学科教室
☎03-3259-0531(学科事務室)
発行責任者：横内憲久(教室主任)
編集担当：高村義晴、阿部貴弘
制作：株式会社ムーンドッグ

contents

巻頭言	1
教室の動き	2
教員の活動	5
学生の活動	6
年間学校行事	6
まちづくりニュース	7
コラム〈私とまち〉	8

巻頭言

福祉のまちづくりじゃなくて、 まちづくりは福祉なんだ

教授 八藤後 猛



「福祉まちづくり」の原点は、戦後復興を世界へ示した東京オリンピック（1964年）に遡ります。閉会後に第2回パラリンピック（第1回は1960年ローマ大会）が開かれました。日本人の多くは、こうした大会があったことすら知らなかったと思います。

当時わが国では、せき髄損傷、ポリオなどによる車いす使用者は、生涯にわたって病院（療養所）か施設で生活することが普通でした。当時「障害者の楽園」ともいわれた収容1,000人規模のコロニーがつくられていた時代です。わが国の選手団も、病院や施設からまさに駆り出された人々の参加でした。しかし外国の選手団をみると、自分と同じ機能障害で同じような車いすに乗っているにもかかわらず、病院や施設から参加した人はほとんどいませんでした。それぞれの地域で住宅に居住し、結婚している者、就労している者までいて、その驚きは「事件」ともいえるものでした。

いままで「障害」とは、その個人に起因しているとはばかり思っていたものが、じつは周囲の環境が、自分たち障害者を「つくりだしている」ことを知ったのです。まちの環境を整えば、それは単に便利になるというだけではありません。自分で買い物にも行けて、自宅でも生活できます。公共交通機関を利用できれば通学や通勤ができ、大学などの高等教育を

受けられ、より高い収入の仕事に就くこともできます。つまり「まちづくり」は人間として地域で普通に暮らす生活権、教育を受ける権利、職業を選択する権利といった基本的な人権を保障するために必要な、用意すべき最低限の社会基盤なのです。すなわち「まちづくり」は、みんなの平等と幸福のための福祉的な行動とも言い換えられます。

パラリンピックの場に居た人々は、その後のまちづくり運動の場で活躍しました。建築や土木分野の人々との交流を主体的に広くもち、今日のバリアフリー法（1994年～）の施行と技術指針にも生かされています。

実践活動としての福祉のまちづくりは1960年代後半、宮城県仙台市に原点がありました。そこで、障害のある施設入居者と、ボランティアの2人が中心となり、1976年に「福祉のまちづくり市民の集い」を発足させます。運動の成果があって初めて公共施設につくられた日本初の車いすトイレは、じつはそこまで移動する手段がない障害者にはほとんど使われませんでした。しかし広くて手すりがあり、当時めずらしい洋式便器のあるこの施設は、口コミによって多くの妊婦さんたちが利用することになります。このとき私たちは、もう一つの回答を得たのです。『福祉のまちづくりじゃなくて、まちづくりは福祉そのものなんだ』と。

1年生の様子

准教授 仲村 成貴



春らしい陽気に恵まれた4月2日に新1年生が初登校しました。広い船橋キャンパスの中を右往左往したのか息を切らせてやってきた学生、緊張した面持ちの学生、人数の多さに驚きの表情を浮かべる学生、これからの楽しい学生生活を思い浮かべているかのように笑顔を見せる学生、環境の変化にやや不安の表情を隠せない学生など、総勢128名がホームルームの1143教室に集合しました。まちづくり工学科第2期生の大学生活は、欠席者・遅刻者ゼロという好スタートで幕が上がりました。教室はほぼ満席で、学生たちの熱気で教室内が暑く感じられるほどでした。初日か



写真1 ガイダンス時の様子

ら、学生生活や履修方法などの説明、事務手続きやコンピテンシー診断の受診など盛りだくさんのガイダンス内容をこなしました。写真1はガイダンス時の様子です。

ガイダンス期間を終え、4月7日に大学での初めての授業「まちづくり工学インセンティブ」を行いました。この授業の中で専任教員全員との顔合わせを行い、理工スポーツホールの前で集合写真を撮影しました。写真2はその時の元気はつらつとした学生たちの様子です。

ゴールデンウィークが明け、学生たちは大学での生活に随分と慣れてきたようです。授業時間中は集中して講義を受けている様子うかがえます。休み時間には、あちらこちらから元気な声が聞こえてきます。また、学生同士の会話だけにとどまらず、教員に積極的に話しかけてくる学生も多く、コミュニケーションの大切さを学生たちは十分に認識しているようです。初心を忘れずに、このままの姿勢を継続してもらいたいと思っています。

5月24日に開催される予定の理工・短大合同スポーツ大会では、学科対抗の長縄跳びが行われます。出場者を募ったところ、多くの学生が積極的に手を挙げてくれました。総勢32名が3チームに分かれて出場します。さて結果はいかに……。

1年クラス担任 岡田 智秀・依田 光正・仲村 成貴

写真2 第2期生とスタッフの集合写真（平成26年4月7日撮影）





初めての懇親会

1年次の後期試験終了直後（2月初め）、まちづくり工学科教員と1年生との初めての懇親会を船橋キャンパスファラデーホールで開催しました。1年間、授業等でお互いに知った存在とはいえ、1年間の学習を振り返ったり、今後の話をしたり、プライベートの相談をしたり……あちこちのテーブルでいろいろな話をすることができました。教員にとっても、参加した学生にとっても非常に有意義な機会となりました。



宅建資格試験のための勉強の本格化

まちづくり工学科では3年次までの宅地建物取引主任者資格の合格を推奨しており、いくつかの学習プログラムを設けています。1年次秋からWEBでの学習を始め、2年次からはさらに授業においても宅建試験にかかる内容を設けて、その対策を進めています。学習の習熟度の差は学生間で開いてきていますが、多くの学生が2年次に合格できるよう取り組んでもらいたいと思っています。

オリエンテーションの実施

まちづくり工学科では、専門科目の学習が本格化する2年前期の早期にオリエンテーションを実施することとしており、5月17日（土）にオリエンテーションを全8コースに分けて実施しました。

当日は天候にも恵まれ、学生は生き生きとまちを見学し、説明に耳を傾けていました。コースによってはそのまちならではの食事をするなどの楽しみもありました。これまでは教室内での授業がほとんどでしたが、実際にまちに出てその現場を自分の目で見て理解するという体験が、まちづくりの専門家として成長していく自覚につながるものと期待します。

オリエンテーションのコース

Aコース	『地方の小さなまちの“まちづくり”を体感する 一長野県小布施町へー』 引率：川島和彦、八藤後猛、落合正行
Bコース	『歴史のみどり探訪コース（明治神宮周辺コース）』 引率：押田佳子
Cコース	『洪水の脅威に備える 安全・安心なまちづくりを学ぶ』 引率：後藤浩、仲村成貴
Dコース	『五感で楽しむ初夏の神楽坂まち歩き～神楽坂界隈の新旧まちづくりプロジェクトを訪ねる～』 引率：阿部貴弘
Eコース	『最新のユニバーサルデザイン設備 一羽田空港国際線ターミナルへ』 引率：依田光正、青木和夫、西山孝樹
Fコース	『東京のウォーターフロントのまちづくり巡り』 引率：横内憲久
Gコース	『足尾銅山の光と影をまなぶ』 引率：城内博
Hコース	『海の上からまち巡り「東京新名所・発掘クルーズ」』 引率：岡田智秀



二歩目の歩み

まちづくり工学科主任 教授 横内 憲久



1年生を迎えた平成25年度の1年間は、“はじめの一歩”ということで、教員も学生も手探りの日々でした。とくに、現2年生は教員が2つのキャンパスに分かれていたことや先輩がいないので、学部情報はサークル等で知り合った他学科の学生から得たことが多かったと思います。今年からは、全教員の研究室が駿河台キャンパスに集結し

ましたので、相談等にどんどん訪れてください。また、今年の1年生は128人、昨年から45人も増えました。二歩目はかなりの大股になりました。学科は大歓迎です！

94年の歴史がある理工学部で最も若い学科です。歴史をつくる、三歩目がさらに大股になるようこの1年魅力を増大させましょう。

昇格・新任教員紹介

昇格



教授 岡田 智秀

私は学生時代（学部～大学院～研究生の約10年間）を本学海洋建築工学科（当時の横内憲久研究室）でお世話になり、今から15年ほど前の1998（平成10）年から出身学科で助手・専任講師を2010（平成22）年まで務めさせていただきました。その間に1年少々を米国州立ハワイ大学にて研究員を経験し、2011（平成23）年に、社会交通工学科（現・交通システム工学科）に准教授として移籍、その後、学科業務と共に、まちづくり工学科設立準備作業に力を注ぎました。そして昨年、まちづくり工学科開設と同時に当学科へ移籍し、その2年目にあたる本年に教授の職をいただくこととなりました。こうした一連の流れを振り返ると、一貫して「景観」「ウォーターフロント」「都市・地域計画」といった研究・教育業務に従事しつつも、分野としては建築系分野から土木系分野へと横断し、そして双方

の知識が生かせるまちづくり系分野に身を置けたことは、まさに自分のキャリアアップとして恵まれたプロセスを歩んできたと感じています。その実現に際しては、必ずと言ってよいほどお力添えをくださった方々が学内外に多々いらっしゃいました。紙面の都合で一人ずつ挙げられませんが日頃より感謝している次第です。

まちづくり工学科では教授陣の中で最も若い立場にありますが、学科内のベテラン教員と若手教員とのインターフェースとなって、引き続き豊かな学科形成に尽力してまいりたいと思います。

ようやくスタートラインに立てたと、今一度気を引き締め、研究・教育活動に邁進したいと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

新任



助手 落合 正行

私はこれまで建築設計事務所で建築設計の実務に携わってきました。個人住宅や集合住宅、店舗、公共施設からインテリアや家具まで、さまざまなスケールの中で多くの人が空間に触れる「場」をデザインしてきました。空間は人が居てはじめて活きます。「まち」も同じです。地域という空間の中で人がどう関わり、コミュニケーションを育むかを考えることは重要なことです。その中で、私は地域のために必要とされる建築とは何か、または建築が地域にとってなし得ることは何かを考えています。

また、現在は東日本大震災で被害を受けた石巻市の雄勝

半島という限界集落の再生プロジェクトに関わっています。津波により一瞬で失ったまちの、わずかに残る遺伝子を探し出し、それらを紡ぐような作業もまちづくりのひとつです。そのためにはひとつの言語（専門領域）だけでは足りず、建築や土木、福祉、景観などのさまざまな言語を話せる人間が必要とされています。

こうした経験を通して、私は今日の日本に「まちづくり」という新しい職能をつくる強い気持ちを持ち、実践と研究を行き来しながら取り組んでいきたいと思っています。みなさんも共に頑張っていきましょう。

『福祉のまちづくり懇談会』を実施しています

助手 西山 孝樹



「福祉のまちづくり」の現場は、教員間だけに留まらず、専門家の間でも具体的な都市像や空間像などが共有できていない現状にあるといえます。

そこで、まちづくり工学科では、「福祉のまちづくり」の第一線で活躍されているパシフィックコンサルタンツ株式会社の方々をお招きし、昨年度から『福祉のまちづくり懇談会』を実施しています。

昨年4月に開催した第1回の懇談会では、パシフィックコンサルタンツ株式会社の皆様から、近年のまちづくりの潮流や「福祉のまちづくり」のこれまでとこれからなど、実践的な事例を紹介いただきました。

続く7月に開催した第2回の懇談会では、「福祉のまちづくり」をマイナスからゼロへ、さらにプラスへと導くため、教員側からヨーロッパ有数の温泉地であるドイツのバーデン・バーデン、ブラウンフィールドを市の公園に再生したアメリカ・シアトルのガスワークスパークなどの具体事例を紹介し、意見公開を行いました。

さらに、本年2月に開催した第3回の懇談会では、それぞれの教員が持つ研究の視点を発展させることができるフィールドを見つけ、産と学が相互の立場で議論を進めていくことが決まりました。今後の活動にも、ぜひご期待ください。

まちづくり工学科教員 講演および受賞等のご報告

■ 准教授 阿部 貴弘

佐野市景観まちづくり講演会

「中心市街地の景観まちづくり

～いきいきとした、賑わいある中心市街地に向けて～

開催日：平成26年2月17日

開催場所：栃木県佐野市中央公民館3階ホール

栃木県佐野市のまちなかの魅力に加え、景観まちづくりの意義やヒントなどを105名の参加者を前に講演しました。



■ 准教授 仲村 成貴

土木学会第68回年次学術講演会優秀講演者賞

論文名：常時微動・地震動観測による高経年化したアーチダムの動特性（その6）一次元有限要素モデルにおける岩盤の境界条件の検討—

開催日：平成25年9月4～6日

開催場所：日本大学生産工学部津田沼キャンパス

土木学会第68回年次学術講演会において、研究成果をわかりやすく豊かな表現方法で発表されたものと認められ、表彰されました。

■ 助教 押田 佳子

景観講演会

「地域の宝さがし～景観を通してみる歴史・文化」

開催日：平成26年2月4日

開催場所：前橋プラザ元気21 3階ホール

講演会では、地域の景観を通してみる歴史・文化として、

「失われた海辺の緑を取り戻す—大阪湾沿岸域における海浜植物保全の取り組み」

「脱世界遺産の観光まちづくりへ—草の根からの古都・鎌倉の挑戦」

「前橋の宝探し—総社山王地域の養蚕家屋群より」

の3事例を紹介しました。



■ 助手 落合 正行

学芸出版社『季刊まちづくり42号』

「集会施設を核としたネットワークづくりの可能性」を執筆

出版日：平成26年4月15日

平成25年度理工学部プロジェクト研究で実施された石巻市雄勝半島の集会施設計画および設計支援を通じて、集会施設の連携による半島全体の集落再生の可能性について執筆しました。

健康をめざしたまちづくりの動き

教授 青木 和夫



少子高齢化・人口減少という、日本の近い将来の社会に対応するために、さまざまな政策や民間のまちづくり計画が進められている。その一つが、「健康長寿社会を創造するスマートウェルネスシティ総合特区」であり、福島県伊達市、新潟県新潟市・三条市・見附市、岐阜県岐阜市、大阪府高石市、兵庫県豊岡市の7市が筑波大学、株式会社つくばウェルネスリサーチと共同で2011年に国から総合特区の指定を受けた。この活動の母体は、スマートウェルネスシティ首長研究会という全国の市長のつくる団体で、2011年では12府県18市が加盟していたが、現在では26市に増加している。ここでいう「健幸」とは、「健康」+「幸福」のことで、「個々人が健康かつ生きがいを持ち、安心安全で豊かな生活を営むことができること」であり、ウェルネスの訳語として用いられている。このスマートウェルネスシティでは、住んでいる人が歩くことによって健康になることを目指したまちづくりが計画の大きな要素となっており、そのためには、自動車の流入を制限する地区等をつくり、安心して歩けるまちづくりが必要で

あるとしている。

一方、国土交通省は2014年度から健康長寿社会をめざして「スマートウェルネス住宅・シティ」を実現する事業を開始する。これは高齢者、障害者、子育て世帯等の多様な世代が交流し、安心して健康に暮らすことができるまちを実現するための事業で、住宅のほかに、公共交通の充実などが提案されている。このように、高齢者や障害者だけでなく未来を背負う子どもたちが健康に暮らせる環境づくりが、これからのまちづくりの大きな柱となってきている。健康で幸せに暮らせるまちづくりの基本は、さまざまな住民が安心して歩ける地区をつくること、自動車の運転のできない人たちの移動手段を確保するために、公共交通を充実させることにあると考えられる。欧州ではすでに自動車の乗り入れの制限された広場やLRT（Light Rail Transit）の導入など、環境と健康を考慮したまちづくりが行われている。日本でもLRTの導入などによりまちが活性化した事例もあり、今後の健康で幸福なまちづくりが推進されてゆくことが必要であると考えられる。



▲デルフト（オランダ）の旧市街の広場



▲高岡市のトラム

四ツ谷

准教授
依田 光正

私が専門とする「福祉工学」にかかわってから、四ツ谷にはかれこれ28年ほど通っている。とはいっても、通う場所は決まっているために、四ツ谷駅の四ツ谷口から外に出る。すると、今では当たり前になっている「点字ブロック」(正式名称は、視覚障害者誘導用ブロック)が続く。歩道部分はもちろんであるが、横断歩道にも敷設されている。これも今ではそれほど珍しいことではない。市ヶ谷方面に向かって点字ブロックに沿って歩くと、「外堀通り」を横断する横断歩道にも点字ブロックがある(写真1)。横断しても歩道に沿って点字ブロックは続き、住宅街へ伸びている(写真2)。この時点で、点字ブロックが随分と丁寧に敷設されているなど感じられたら、あなたはなかなか「福祉のまちづくり」への感度が高い。さらに、右折してからもしばらく点字ブロックは続き、点状ブロック(注意喚

起)となって止まっている。その先は、かつてよく見かけた、中央に鉄製手すりが付いた石造りの階段である。しかし、階段下から点字ブロックはさらに続いている。この階段の先に私が通い続ける「日本盲人職能開発センター」がある(写真3)。ここは、戦争で失明した松井新二郎氏が1976年に開設した、視覚障がい者に職業能力開発をおこなう施設であるとともに作業所でもある。私は、全国障害者技能競技大会(愛称:アビリンピック)を学生時代(当時は全国身体障害者技能競技大会、愛称変わらず)からお手伝いさせていただくなかで松井氏にお会いし、職に就いてからもこの施設には見学等々でたいへんお世話になってきた。四ツ谷の駅から当時と変わらぬ建物の本センターまで歩いていくと、いろいろなことが思い出される。また、周囲の住宅も昭和の趣があって、一層のこと設立当時を偲ばせる。なお、当施設へは石造りの階段を使わない別ルートもある。未筆ながら、松井氏が日本大学の卒業生であることも、何らかの縁を感じさせてくれる「まち」である。



◀ 写真1



▼ 写真2



▲ 写真3

写真1 外堀通りの横断歩道から向かいの道へと続いている点字ブロック

写真2 住宅街の点字ブロック

写真3 階段手前の点字ブロックと階段下から続く点字ブロック。階段下正面が日本盲人職能開発センター